

静岡文化芸術大学図書館・情報センターだより

新 知 人 故 温

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2008.7 Vol.12

平成20年7月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL (053) 457-6124 FAX (053) 457-6125
http://www.suac.ac.jp/library/

Contents

■表紙

伊勢神宮 ①

■図書館散歩

学生諸君、ひとつ ② だまされたつもりで…… 勇を鼓し推す6冊+1冊

文化政策学部 国際文化学科 学科長
馬場 孝

本を楽しむ、 ③ こんな愉しみ

デザイン学部 生産造形学科 教授
迫田 幸雄

■〈シリーズ〉

図書館・情報センターを使いこなそう! ⑩

国立国会図書館 ④ Web サイト編

■巻末

知っておきたい ⑥ 図書館用語 《入門編》

図書館からの お知らせ



伊勢神宮

『神宮：第六十二回神宮式年遷宮へ向けて』神宮司庁, 2006 [175.8/J52]
「遷御直前の皇大神宮御正宮」(90～91頁)

伊勢は常世の波が絶え間なく打ち寄せる国であり、差し昇る朝日射すうまし国である。そこに我が国祖宗の根源として相承される太陽の女神天照大神を齋き祀る伊勢神宮がある。緑深い山、清冽な五十鈴川の流れる神々しい聖地に、古代そのままの端正な姿の殿舎が建つ。

ドイツの優れた建築家ブルーノ・タウトは「伊勢神宮は、独創的な真の日本だ。日本固有の文化の精髓であり、世界的観点からみても、古典的天才的な創造だ。」と絶賛した。また、英国の歴史家アーノルド・トインビーは、清らかな五十鈴川の流れに手を浸し拝礼後、「この聖地において、私は、あらゆる宗教の根底的な統一を感得する。」と毛筆で記帳している。

式年遷宮では、大御神をお祀りするために二十年に一度宮処を改め、御社殿や御装束・神宝など一切を新しくして、大御神に新宮にお遷り頂くことにより、更なる御神威を仰ぎ、わが国が永遠に瑞々しく栄えていくように祈る。伝承された古式のままに、七百余种約千六百点の御装束・神宝が、当代最高の技術を有する美術工芸家により新たに調製される。千年以上にもわたって作り伝えられてきた古代の技術や様式は、まさに「生ける正倉院」と呼ばれるにふさわしい。

平成二十五年の式年遷宮に向け、本年四月には鎮地祭がとり行われた。

【参考文献】

- ・丹下健三、川添登、渡辺義雄『伊勢：日本建築の原形』朝日新聞社, 1962. [521.81/Ta86]
- ・所功『伊勢神宮』(講談社学術文庫) 講談社, 1993. [081/Ko191/1068]



文化政策学部 国際文化学科 学科長
馬場 孝
Baba Takashi

文中に登場した図書

アレクサンドル・デュマ著、山内義雄編注

『モンテ・クリスト伯』
081/lw21/533

ロマン・ロラン著、豊島与志雄訳

『ジャン・クリストフ』
958.78/R64/1-4

三浦綾子著

『道ありき』
918.68/Mi671/3

吉野源三郎著

『君たちはどう生きるか』
081/Lw11/158-1

高史明著

『生きることの意味』
289.2/Ko11

アガサ・クリスティ著、中村妙子訳

『春にして君を離れ』
933.7/C58

小室直樹著

『ソビエト帝国の崩壊』
302.38/Ko69

学生諸君、ひとつだまされたつもりで……勇を鼓し推す 6冊+1冊

人に本を薦めるには、少しばかり「勇気」がいる。学生の頃には特にそうだった。期待に添わなければ「つまらなかった」と文句を言われ、「時間返せ」と嫌味を言われ、下手をすると「見損なっただぞ」と軽蔑すらされかねない。しかし、これまで知人、友人の誰に薦めても、感謝、感激されこそすれ、「面白さ」という点で、決して彼らの期待を裏切ることのなかった1冊がある。アレクサンドル・デュマ『モンテ・クリスト伯』だ。読んだ友人のうちには、のめり込んだあまり「モンテ・クリスト伯の年表」まで作ったのが2人もいた。

読後の感想としていつも耳にしたのは、次の二言だ。ひとつは「ああ、もったいない」である。つまり、この本は長い。僕が読んだ岩波文庫は7分冊だった。その中に、今日であればベストセラーの5冊や10冊に十分になりうるいわば一騎当千の「お話」が、何の惜しげもなく投入されているのだ。しかもそれらの「お話」はオムニバスで並んでいるのではなく、意外や意外、複雑怪奇に絡み合い、全体でさらに見事な「お話」を織りなしている。どんな具合に織りあい絡み合っているのか一望に収めたく「年表」を作りたくなる気持ちもよく分かった。感想のもう一言は「ああ、あぶなかった」だ。何があぶなかったのかといえば、子どもの頃『巖窟王』を読んでいて、『モンテ・クリスト伯』と聞いても、「ああ、あれか」と思い込みかけていたというのである。『巖窟王』を読んだがために『モンテ・クリスト伯』を読み損ねたら、やはり不運であり不幸だと思う。この本の語り尽くせぬ「面白さ」については、文芸評論家にして作家の中島梓（栗本薫）が、『読みなおす一冊』（朝日新聞学芸部編）で、ほぼ語り尽くしている。

人生が「チャレンジ」であるとすれば、失敗はつきもので、何をやってもうまくいかない時期が誰にでも、1度や2度あるのかもしれない。僕にはその1度や2度がまとめて来たように思える時期があった。「この1冊で救われた、この1冊が支えになった」という言い方は決してしたくないが、そのころ読み、深いところで揺さぶられ、今にいたっている1冊が、ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』である。長編小説は売れなくなった、読まれなくなったと聞いて久しい。多くの人が「寝食を忘れてのめり込む」のは小説ではなく、「ゲーム」なのだろうか。ひょっとしたら『モンテ・クリスト伯』の「面白さ」は、仮想空間の中で再現ができていいのかしれない。しかし、『ジャン・クリストフ』の深みや重みは、ゲームでは決して創出できないと思う。

長編でなくても「書物」ならではの魅力を持つ本は多い。今日なお多くの読者を得ていると聞く三浦綾子『道ありき』も、もし未読であれば、学生諸君に一読を勧めたい。また、題名だけで引いてしまっただけで済まないのが、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』だ。へこんでいるとき、とんでもないことをしてしまったという後悔や自己嫌悪に苛まれるとき、この本の中の「雪の日の出来事」「石段の思い出」あたりは「薬効」ありと思う。高史明『生きることの意味』も書名にはとっぴき目をつぶって、頁をめくってみてほしい。ジャンルに結びつくイメージにだまされてもいけない。アガサ・クリスティといえば「ミステリーの女王」だが、クリスティ自身が「自分で完全に満足いく1冊の小説」と語るのとは、実はミステリーではない。『春にして君を離れ』。彼女のミステリーを読破した諸君、この本を「だまされたつもりで」読んでみられよ。ミステリーとは別の意味で、ミステリーよりも、実に「こわい」。

さて最後の「勇気」をふりしぼり、推薦するというより言及しておきたい本がある。小室直樹『ソビエト帝国の崩壊』である。この本が書かれる数年前から、大学の教員でもなかった彼、小室氏のまわりに学生が集まり、受講料なし、単位もなしの「自主ゼミ」が開かれていた。「手弁当」どころか、小室氏は、一切食事をしない。論文執筆中は断食という噂だった。「飯を食うより学問が好き」とはこのことかと妙に納得したことを覚えている。しかし、ある夏休みに連絡が来て、先生がゼミでの「断食中」について倒れたという。入院費用のカンパの呼びかけだった。「ゼミ生」たちに助けられた先生は大いに反省し、経済的基盤を確立するため、これからベストセラーを7冊書く、と宣言する。そして最初に書かれたのがこの『ソビエト帝国の崩壊』であった。

それから11年後、結果においてこの「予言」は成就した。ソ連崩壊については、読むべき文献はすでに別にある。しかし、学生時代に成り立ちの一端に触れる機会のあったこの本は忘れがたい。なにより、崩壊という「結果」もさることながら、社会科学の粋を集めロジックを展開し、崩壊の「理由」を深層において言い当てていたという意味で、カップブックスという非学問的な体裁で書かれていたものの、恐るべき本であったと今でも思う。



デザイン学部 生産造形学科 教授
迫田幸雄
 Sakoda Yukio

文中に登場した図書

紫式部著、山岸徳平校注
『源氏物語』
 081/lw3/128-133

田辺聖子著
『新源氏物語』
 913.36/Ta83/1-5

徳川黎明会、五島美術館（編）
『源氏物語絵巻』
 913.36/Mu56

徳川黎明会、五島美術館（監修）
『源氏物語絵巻：国宝』
 721.2/G34

小学館辞典編集部編集
**『新版 色の手帖一色見本と文献例
 でつづる色名ガイド色の手帖』**
 757.3/I66

福田邦夫著、日本色彩研究所編
『日本の伝統色一色の小辞典』
 757.3/Su32

金田一春彦（ほか）編
『新明解古語辞典』
 813.6/Sh64

牧野富太郎著、小野幹雄（ほか）編
『原色牧野植物大圖鑑』
 470.38/Ma35

清少納言著、渡辺実校注
『枕草子』
 918/Sh64/25
 *多数あり

紫式部著、池田龜鑑（校訂）
『紫式部日記』
 915.35/132
 *多数あり

本を楽しむ、こんな愉しみ

今年は『源氏物語』千年紀だそうだが、数年前、講義の話題作りにと、作中にどんな色が何回出てくるか調べてみようと思いついた。高校の授業で「なんでこんなものを読まなきゃいけないの」と、ごく短い断片なのに嫌々やり過ごしたことを思い出すにつけ、桐壺源氏で頓挫という悪い予感もあったが、なんと、物語の展開の面白さに引きずり込まれて、巻を重ねた。源氏の色彩世界のイメージならば、国宝の絵巻や断簡を複写した、美しい『源氏物語絵巻』の大型本が多くあるからそちらを見れば、という話もあるが、それでは一場の情景を切り取った絵師のイメージを観ることになる。私が知りたいのは、作者紫式部が物語の中でどんな色名を使い、あるいは色のイメージを表現しているか、平安中期の貴族生活シーンのなかでどんな色に囲まれていたのか、できれば作者の色彩嗜好までも分ればさらに面白いという、役にも立たないことであった。この思いつきをすっかり気に入ってしまい、誰かが既にやったかも知れんとは思ってもせず、衝動的に始めてしまったのである。

まず、山岸徳平校注の岩波文庫全巻6冊を買い揃え、行を追って片端から色の名や、明らかに色がイメージできる記述に線を引いて記録し、数えあげる作業を進めた。読解の行き詰まりを防ぐ保険に、田辺聖子『新源氏物語』新潮社版3巻を脇においた。つまりアンチョコである。対訳ではないけれど、とても助けになった。また、『色の手帖』『日本の伝統色』など、各種色名辞典にお世話になったこと、いうまでもない。金田一京助監修『新明解古語辞典』では一再ならず蒙を啓かれた。例えば「朝顔（あさがほ）」が、往時、桔梗やムクゲであることを知り、色の特定に迷った末『原色牧野植物大圖鑑』などを当ると、朝顔が桔梗であったのは万葉の時代であり、今いうツル性の朝顔は平安初期に渡来し定着したとある。当時の花の色は薄水色、アントシアニンブルーであったという。

疑わしきは入れず、ざっくりとしたものだが、拾い出しが進み、伏線はあったとはいえ、素っ気ない光の死から始まる匂宮から、橋姫以下の宇治十帖に至ってはガクンと色数が減り、墨や鈍の喪の色をはじめとした色数が何ページも空けてちらほら印せる程度で、同じ作者かと疑うほどの落差である。

そこで、源氏生前の「幻」までを一区切りとして、色の総数の正方形を作りその中に、出てきた量に比例した各色の正方形を隙間なくはめ込んで構成した。なかなか陰影のある華やかなグラフィックになり、ひとりにのみりしながら学生に見せた。きっと喜んでくれるだろうと思いきや、デザイン学部生からは反応ゼロ、国際文化学科の女性一人が面白いと感想を寄せてくれたのを思い出す。

こんな作業をするなか、目的とは関係ないが、胡蝶の巻でヒエツと驚く発見をした。六条院の宴の段で女官の詠んだ歌「春の日のうらゝにさして行く舟は棹（さ）を）のしづくも花ぞ散りける」。そう、春の隅田川の情景を詠った唱歌「花」の一節とほとんど同じじゃないかと嬉しくなって連れ合いに話したら、シロトねえ、日本の詩歌で本歌取りは日常のこと、むしろ取りかたの上手さを愛でるくらいだと一蹴された。案の定、田辺聖子さんがどこかのブログに丁寧な解説を寄せておられた。とまれ、私の中ではしばらくの間うきうきできたわけで、これも読書の愉しみの一つと思う。

さて、学生の冷やかな反応をよそに、確信犯的に気に入った色彩世界調べ、次は『枕草子』だと、辛気くさい作業にうんざりしたこともあったはずなのに、ムクムクとその気が満ちてきた。ただし、またまた一人苦労することはないと知恵が付き、毎年の講義で「どうだ、やってみるか。」と糸を垂れて3年、やっと女子学生一人の当たりがあった。やれ嬉しやと文庫本を買い渡し（自腹です）、こまごまと手ほどきの上、待つこと1年余、まったくの梨の礫に業を煮やし、というか自分の甘さに腹を立て、こらえ切れずに始めてしまった。

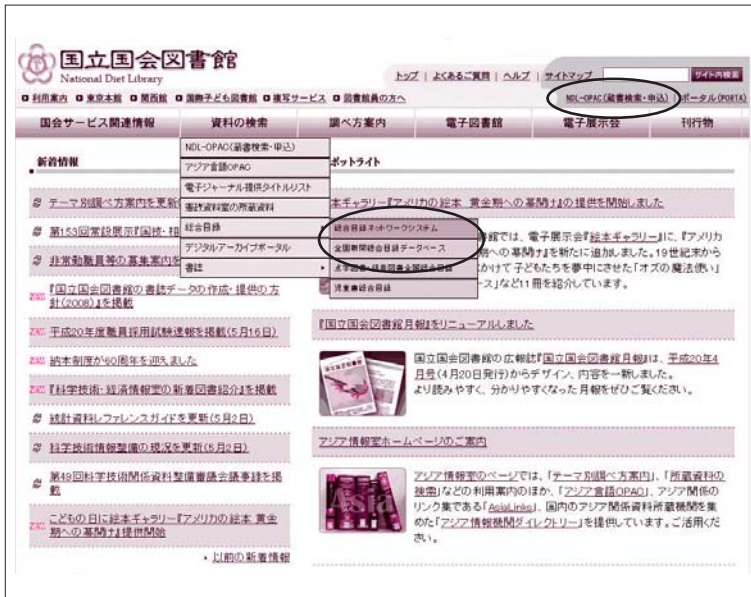
とりあえず清少納言の人となりやいかにと、『紫式部日記』を開くと、あった、あった。会ったこともない宮仕えの先輩を、マダム・ヴァイオレットはこうまで徹底的にこき下ろすのかと、をんなの妬みに恐れをのいたことではありましたが、そうであればこそ二人の色彩世界を比べたいと、作業はスイスイ進み、めでたく並んだ。で、結果は？。やだよ、教えない。

国立国会図書館 Web サイト編

「国立国会図書館 Web サイト」とは？

国立国会図書館の Web サイトには、一般資料や雑誌記事検索のデータベース、国立国会図書館と都道府県立・政令指定都市立図書館が所蔵する和書の総合目録である「総合目録ネットワークシステム」、新聞を所蔵している機関の検索ができる「全国新聞総合目録データベース」など、皆さんの学習や調査・研究に役立つページがたくさんあります。今回は、その中から代表的なものをご紹介します。ぜひ活用してください。

① 国立国会図書館 トップページ (http://www.ndl.go.jp/)

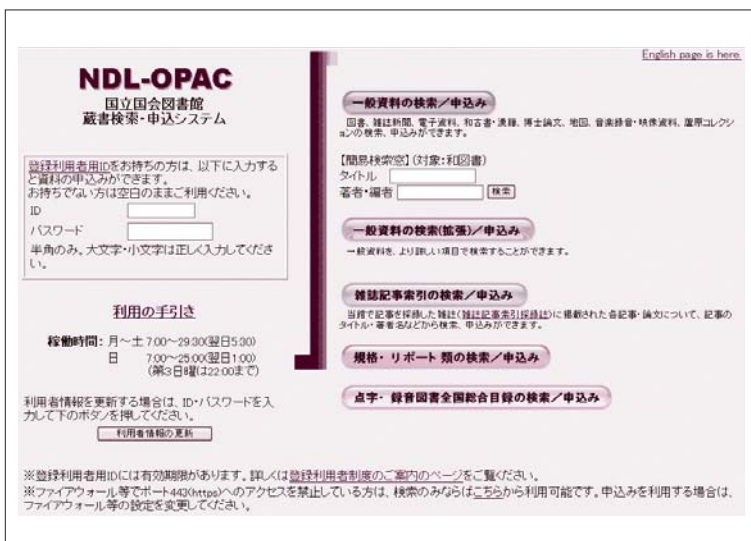


国会の立法活動を補佐する機関であり、また、わが国で唯一の国立図書館である国立国会図書館は、昭和 23 年(1948 年)に設立されました。国立国会図書館は、納本制度により国内出版物を広く収集・保存するほか、国民や国会・行政に対し、さまざまなサービスを行っています。

これが国立国会図書館のトップページです。新着情報やトピックのほか、さまざまなコンテンツへのリンクがあります。以下で紹介するデータベースにも、ここからジャンプすることができます。

サイトのコンテンツは常に更新されていますので、情報を調べるときは、まずトップページにアクセスすると良いでしょう。

② NDL-OPAC トップページ (http://opac.ndl.go.jp/)



NDL-OPAC とは、国立国会図書館の蔵書検索・申込システムのことです。

「一般資料」、「雑誌記事索引」、「規格・レポート類」、「点字・録音図書」それぞれの検索ができます。

例えば一般図書の場合、電子資料、和古書・漢籍、博士論文、地図、音楽録音・映像資料も検索することができます。

また、雑誌記事索引の検索では、国立国会図書館で記事を採録した雑誌記事・論文を、タイトルや著者名から検索することができます。

次ページに、書誌一般検索と雑誌記事索引検索の検索画面を掲載してあります。

◎書誌一般検索の画面(単行本単位の検索)



タイトル、著者、編者、出版者等から検索できます。
当館ホームページ「蔵書検索」の項からも検索できます。

◎雑誌記事索引検索の画面(雑誌記事・論文の検索)



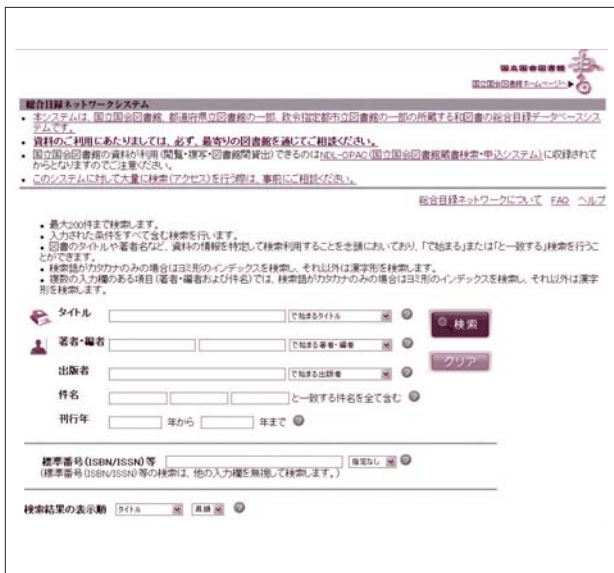
論題名、著者、雑誌名等から検索できます。
当館ホームページ「蔵書検索」の項からも検索できます。

③総合目録ネットワークシステム
(<http://unicanet.ndl.go.jp/>)

総合目録ネットワークシステムとは、国立国会図書館と、都道府県立図書館・政令指定都市立図書館の所蔵する和図書の総合目録データベースシステムです。

現在のデータ提供館は61館で、平成20年2月末現在のデータ件数(総書誌数)は、約3千7百万件にのぼります。

検索画面では、タイトルや著者、出版社・刊行年をはじめ、件名やISBNから検索することもでき、便利です。



当館ホームページ「蔵書検索」-「蔵書検索一覧」の項からも検索できます。

④全国新聞総合目録データベース
(http://sinbun.ndl.go.jp/o_eturan.htm)

全国新聞総合目録データベースでは、探している新聞を所蔵している図書館がわかります。それぞれの機関が所蔵している新聞の一覧や、その新聞の公開・複写・レファレンスの可否を調べることができるうえ、新聞の書誌事項を確認することもできます。

まず、検索メニューのトップ画面で、新聞の検索か所蔵機関の検索かを選択します。新聞の検索では、新聞名、新聞の形態、出版社、出版年などから新聞を探すことができます。



当館ホームページ「学習役立ちサイト」-「新聞」の項からも検索できます。

ここで紹介したデータベース以外にも、国立国会図書館の Web サイトには、国立国会図書館の利用案内、図書や論文の効果的な探し方・調べ方の紹介、日本と世界の議会・法令・官庁資料、国立国会図書館が所有する貴重な資料の画像(デジタルアーカイブ、デジタルライブラリー)など、広範囲にわたる非常に数多くの情報が掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください。

知っておきたい図書館用語《入門編》

用語	解説
OPAC	Online Public Access Catalog の略称で「オンライン閲覧目録」と訳される。図書館の蔵書を検索するシステムのことをいう。インターネットを利用した検索が可能である場合も多い。
NDC (日本十進分類法)	Nippon Decimal Classification の略称。日本における標準的な図書分類法で、3桁の数字(および小数点以下)で構成される。具体的には、百の位で主題別に0から9までの数字を割り振り、さらに十の位・一の位(および小数点以下)で内容・項目別に分類する。例えば、法律は320、建築学は520、工芸は730である。自分の関心のある分野の番号を予め覚えておくと、図書館で効率的に資料を探ることができる。なお、本学の『図書館・情報センター利用案内』8ページにNDCの綱目表が記載されているので、参照するとよい。
請求記号	図書の背表紙に貼付されているラベルの番号。3段で構成され、上から「分類番号(NDC)」、「著者記号」、「巻冊番号」の順。図書館で図書を探す際の「地名・番地」の役割を果たす。
書誌	個々の資料を特定・識別するための情報のこと。具体的には、タイトル、著者名、出版者(社)名、出版年、大きさ、ページ数など。なお、著者や分野に基づいて資料を体系的にまとめたリストを指す場合もある。
所蔵	ある書誌が、各図書館に所有されていることを示すデータ(所在、請求記号、貸出状況を示す)のこと。また、図書館で資料を所有することを指す場合もある。
ISBN ISSN	ISBN(International Standard Book Number)は、13桁(2000年までは10桁)の数字で構成される、図書の国際的な識別番号のこと。現在発行されているほとんどの図書に附されており、図書の裏表紙にバーコードと共に記載されることが多い。 また、ISSN(International Standard Serial Number)は、8桁の数字で構成される、逐次刊行物(雑誌類、定期刊行物)の国際的な識別番号のこと。表紙の右上に記載されていることが多い。 個々の資料を識別できるため、図書館や書店で資料を探す際、事前にISBNやISSNがわかっていると便利。
参考図書 (レファレンスブック)	特定の物事・事項や情報を調べるための図書のことをいう。具体的には、辞書・事典、図鑑、白書・年鑑、年表、地図、人名録、各種データ集など。なお、学習教材の「参考書」とは異なるので注意。
紀要	大学や研究機関・学術団体などが定期的に発行する刊行物のこと。研究論文や研究発表・研究報告などが掲載されている。
製本雑誌	同一タイトルの雑誌類何冊かを綴じ合わせ、扱いやすいように一冊にまとめて、ハードカバーの冊子体にしたものをいう。製本は、雑誌の保存性を高めるために行う。なお、1冊ずつばらばらの状態の雑誌は「未製本雑誌」と呼ぶ。

図書館からのお知らせ

著作権を尊重しましょう

すべての著作物は著作権法で保護されており、著作権者の許可なく複製(コピー)することはできません。図書館における著作物のコピーは、著作権法第31条第1項の規定に基づき、限定的に認められているものです。

例えば単行本の場合、本文の半分以上をコピーすることはできません。また、雑誌や新聞の最新号はコピーできません。絵画や写真については、個々の絵画・写真の半分までしかコピーできません(1頁以下の絵画・写真は複製不可)。著作物のコピーは1人につき1部に限られています。著作物をコピーする場合は、各コピー機に備え付けの「学内文献複写申込書」に必要な事項を記入してください。

なお、本学図書館のコピー機は所蔵資料を複製するためのものであり、個人で持ち込んだ資料やノートをコピーすることはできません。

図書館の利用マナーを守りましょう

《図書は正しい場所へ》

本学の図書館・情報センターでは、利用者自身が、利用した資料を正しい場所に戻すことになっています。次に資料を利用する方のために、読み終わった資料や返却する図書は、必ず請求記号どおりの場所に戻して下さい。

《返却期限の遵守》

貸出資料は、必ず返却期限までに返却してください。閉館時には、ブックポスト(北棟北入口)に返却してください。返却が遅れた場合、その資料が返却されるまで、新たな資料の貸出ができなくなります。

《飲食の禁止》

図書館・情報センター内(メディアステーションを含む)での飲食は禁止されています。飲食物を持ち込むこともできません。これは、図書館所蔵資料の汚損や設置機器(コンピュータなど)の故障、害虫の発生などを防止するためです。

《傘は傘立てに》

傘に附着した水滴は、資料汚損や機器故障の原因となるほか、カビの発生につながります。傘は、図書館入口にある傘立てに置いてから入館してください。また、傘を持ち帰る際は、自分のものであることを十分確認してください。